

「びっくりして、そしてうれしくなりますよ」。そんな言葉に誘われ、さいたま市で今月上旬にあった高校生の集まりを取材した。



埼玉、栃木両県内の2年生を中心にした48人が3日間にわたってのぞんだ「高校生のための古典セミナー」だ。

主催は日本アスペン研究所（東京都港区）。現代人は目の利権や専門分野にとらわれ、全体像を見失いがちだという反省から米国で創設された。日本での設立は1998

水説 sui-setsu 中村 秀明

年。「古典」を教材に参加者が議論する形式のセミナーを、企業や官庁の幹部を対象にして開いている。

その高校生版として2013年から地域の教育委員会や教師の協力を得て埼玉県で始まった。今年は奈良、岡山両県と北海道でもあり、来年は広島県が加わるという。

今回の48人は3班に分かれ、六つの古典の抜粋を読み、それぞれ90分間、意見を交わした。最初は松尾芭蕉の「奥の細道」だった。ある班では「日々旅にして旅を栖すまとす」

対話する高校生

という冒頭に近い部分から活発に意見が飛んだ。

「物理的な意味での住みかはいらないのだ、という芭蕉の思いつきじゃないかな」

「非日常の旅に向かい、日常にもう自分の居場所はない。そんな決意がある」

「物よりも経験が大事だった、物に執着しない芭蕉の精神性を感じました」

だれかの発言をきっかけに持ち前の自由で柔軟な発想に火がつき、話はどんどん広がっていく。

教師が司会役になっている

が、結論や正解を求めるようなことはしない。対話を重ね、思考を深めていくのが狙いだ。異なる見方や切り口を知り、自分なりの考えが固まっ

て言葉にしたくなるのは、その意味で理想的だろう。

アリストテレスの「形而上学」を取り上げた90分間、「日々の生活には役立ちそう

にもない、そうしたことにについて考えるのが大切なのだ」と説くアリストテレスに共感します」と語った生徒がいた。

3日間を通して、彼らは学校での授業のように一方的に

教えられるのではなく、話し合い、刺激を受け、触発され、そして考える大切さを共有していくようだ。

見知らぬ若者同士が対話を重ねながら、考える場面をもっと見たくなった。人種や宗教、言語、国境を超え、「共感」という橋をかける営みにも通じるはずだ。

高校生がそんな可能性にあふれていることを教えられ、それを閉ざさず、伸ばしていくために何ができるかを考えたいと思った。（論説委員）